

二。欲爲佐々木氏立後、許先賜祿三千石。定治曰。大阪事在近。在。逃逃臣。宜知畏避。今聞命。命。出。是自重其罪也。固辭不就。蓋其心在不。敢負大阪食新朝之祿。乃託避辭。自遜。是時蒲生忠鄉襲封會津。在。東。奧。爲。大。國。忠。鄉。之。先。近。江。人。也。世。仕。六。角。氏。定。治。往。客。忠。鄉。之。所。忠。鄉。以。定。治。有。舊。主。之。義。常。敬。而。待。之。甚。厚。後。去。會。津。居。京。又。來。江。都。寬。永。六。年。先。君。微。妙。公。有。命。徵。定。治。明。年。賜。祿。七。百。石。自。是。委。贖。本。藩。歷。仕。三。世。正。保。三。年。今。公。嗣。位。之。初。加。賜。三。百。石。萬。治。三。年。請。命。致。仕。傳。祿。男。定。之。別。賜。定。治。米。俸。百。口。以。老。于。家。初。大。坂。之。難。定。治。爲。豐。臣。氏。城。守。有。軍。功。世。有。粗。知。之。者。陽。廣。公。召。定。治。問。之。定。治。曰。臣。無。之。以。告。者。之。過。也。其。孫。定。賢。幼。時。乘。間。問。之。不。答。強。請。定。治。怒。曰。兒。何。知。遂。終。身。絕。口。不。言。大。坂。事。其。謹。信。如。此。と。實。に。義。士。の。一。畸。人。と。い。ふ。べ。し。

○圖書橋

金澤橋梁記に、圖書橋しやうす高。とありて、舊藩中は物構堀の橋なりしかど、廢藩後物構堀を廢し、今は土橋となしたり。従前は加藤圖書の邸前の橋なる故に、圖書橋と呼べり。

り。按ずるに、此の橋古名は左近橋と呼べり。國事昌披問答等に、元祿三年三月十七日金澤左近橋之西堀宗叔方より出火すと見え、元祿六年の土帳に、永町左近殿橋之向、或は左近殿橋敷の内など見え、又青山將監は長九郎左衛門近所左近橋向ともあり。享保九年の土帳には、青山將監圖書橋向と記載し、自餘の人々も皆圖書橋近所などありて、左近橋の名は見えず。左近橋の名は、稻葉左近の居邸より起れり。一説に、左近が舊邸は深美氏の居邸の向にて、此の舊邸の傍なる溝橋をば左近橋と呼べりと。三州志にも、稻葉左近の第地は今の江守要人の宅地と云ふ。一説には、今の前田木工の宅地にて、今も門前の橋名を左近橋と云ふ由即ち前田木工傳聞すと語るとあり。但し彼の溝川の板橋を左近橋といふは、後人の過聞なるべし。記録に載せたる趣と齟齬す。

○加藤圖書邸跡

延寶金澤圖に、加藤圖書前口廿九間一尺、東側三十一間一尺、西側三十一間五尺。とあり。元祿六年の土帳に、加藤圖書堤町の小路深美右京隣。と見え、享保九年土帳には、加藤

主水圖書橋。とありて、世々爰に居住せり。

○加藤宗兵衛重廉傳

重廉は加藤氏の始祖にて、尾張の産也。初め信長公に奉仕し、天正十三年九月加州へ來り、利長卿に仕へて、六千俵を賜はり、慶長五年八月五百石加恩ありて、三千五百石を領し、人持組たり。長男大炊里重も、慶長四年八月八百俵を賜はり、父子共に奉仕せり。然るに慶長十年十一月晦日金澤城郭雷火にて炎上し、此の時火を防ぎ居たる處、塩硝藏へ火移り、塩硝散亂し、父子諸共火傷致し、宗兵衛重廉は其がため翌十一年正月十二日没せりと、家譜に載せたり。家藏利長卿の親翰寫。

書狀披見候處、加藤宗兵衛相果候由、不便候。然者彼知行三千五百石之内三千石、大炊に遺可申候。殘る五百石と今迄大炊取申四百石、合九百石分、大炊弟にとらせ可申候。馬廻へ入候べく候。大炊と一所に役等をも可仕候。將又大炊弟前々より取來候知行三百石は、此方へ請取、則代官可申付候。右之趣念を入可被申聞候。し。

正月十九日

利長

横山大膳殿

將又宗兵衛脇差如目錄之、かなぐ以下請取申候。此由大炊へ可申聞候。

右長男大炊、父遺知の内三千石賜はり、後圖書と改稱し、次男は宗兵衛と呼べり。改稱に付き利常卿より賜はる判書如左。

亡父加藤宗兵衛知行之内、三千石之處令扶持畢。慶長十一年 依改各 今與之 全可收納狀仍如件。

承應三年十二月朔日 加賀守

加賀守就在江戸一判如此。

肥前利常判

加藤圖書殿

此の孫圖書重長二千石賜はり、其の子刑部重清は千五百石賜はり、寄合組と成り、此の後世々千五百石を賜はりたり。

○宗叔町

此の町は圖書橋の下邊にて、元祿の頃堀宗叔といへる醫師居住し、高名なる醫家なるに依つて、町名に呼べりと云傳へたり。按ずるに、元祿頃の記録共には、此の地邊をば長